

犬に育てられた男

takaotaniguti

私が今生きているのも、家族を持って生活できるのも、幼い頃私を育ててくれた数多くの犬達のお陰です。人間以上の母性愛を持った犬達には本当に感謝しています。私に四本の歯が鋭い牙のように生えているのも、尻に尻尾の跡があるのも、犬の乳を飲んだり犬小屋で寝ていたせいなのか……今では性格も似ているように思います。

私の母は結婚し私を身ごもりました。産み月間近に離婚し、母の実家で私を生みました。それから祖父母に私を預けて都会に出て行きました。

私は世の中に母親や父親という存在があるのを、小学校に入学するまで知りませんでした。また、分かってからも祖父母がそのようなものかぐらいにしか考えていませんでした。なぜか私には親の必要性を考える余裕や暇もなく毎日を必死に生きていた気がします。今になっては、子供の頃に子供らしくいられなかった自分が可哀想でなりません。でもそんな時代を共に過ごせた犬達のお陰で、自分が世間の子供達と違うとは気づかなかっただけです。犬は時として母になり、また父になり私を絶えず守ってくれました。

私が育った家は大阪の山奥にあり、大家族でした。祖父母は七人の子供をもうけ、私の母は上から二番目でした。そのため私が預けられた家には、母の弟や妹が四人住んでいました。私は叔父や叔母に気遣い、祖父母の顔色をうかがいながら生活していました。歯磨きやシャンプーの仕方も分かりませんでした。テレビも漫画も見たことのない、子供か大人かの区別もない、生命力のとても強い人間へと鍛えられたのです。

食べ物でよく覚えているのは、すき焼きに遣う牛の油です。本当は肉が食べたいのだけど、みんなが食べるので、私は肉の味が染み込んでいる残った油を大好きと言って食べるような子供でした。

また正月になると大変でした。嫁いだ叔母さん達がお婿さんや子供を連れて帰って来るので、私の立場がますますない状態でした。こんな時に少しでも本当の親の必要性を感じたように思います。私は祖父母や叔父、叔母に気に入られるようなことばかり考えて暮らしていました。近所に同級生や友達もなく、二、三歳上の人達には『いじめがいのある憎たらしいガキ』としてよくいじめられました。そんな時、私を助けてくれたのも、大きな犬達でした。

私の家には祖父が猟師をしていたので、家には絶えず猟犬がいました。みんな大きくて強く、たくましい僕の守り神でした。『チビ、シロ、フク、ジゾウ、クロ』。みんな強くて優しく、友達として親として、私を助けてくれました。猟犬はみんな寿命が短いですが、その中でチビだけは二十四年も生きてくれました。待ち伏せされたりいじめられかけた時は、いじめる上級生を撒き散らしてくれました。『背の高い祖父に猟銃に犬』。普段いじめにあっていても、この三つが揃っていれば、山に行く時に出会った者達を見下ろしているようで本当に気持ちよかったです。

チビは私をととても可愛がってくれました。

チビとは生まれた時からずっと一緒に、私を抱っこするように添い寝をしてくれました。雄でしたが、お乳も触らせてくれました。

暗い夜道も全く怖くありませんでした。チビは夕方になると迎えに来てくれました。またある時には、何匹かの犬達と喧嘩してくれました。チビは強かったです。老犬なのに最後まで喧嘩していました。僕を噛んだ犬をやっつけてもくれました。そんな姿が、親は子の為に命を懸けて助けてくれるように思いました。私にはおもちゃも、テレビで漫画を見ることも、正月に親戚が帰ってきても、犬達がいるから何の問題もありませんでした。

シロは飼っていた牛が逃げた時、連れて帰ってきましたこともありました。

シロは猟に出たまま一週間帰ってきませんでした。ある夕方シロがイノシシを引きずって帰ってきました。その夜はイノシシのすき焼きをしたのを覚えています。

シロは猟師の間では有名な猟犬で、ラジオでも放送されるくらい優秀な猟犬でした。私がまだ幼い頃、シロの背中に乗っている写真がありました。ある日、ラジオに出てからすぐ盗難に遭い帰ってきませんでした。私は子供ながらに、いくつかの別れを体験します。

チビとも別れる時が来ました。

チビは二十才で、犬同士の縄張り争いに参加して、ぐちゃぐちゃに噛まれ、川に落とされ、ふらふらで家に帰って行く所を私は見ました。三日くらい生きて、最後を私に見せてくれました。

私の育て親達がいなくなります。その度に涙が出ます。

チビの墓には毎日行きました。涙が出なくなるまで通いました。私が今泣けないのは、生まれてから十年で出し尽くしたからなのかもしれません。

また、次々と別れが訪れました。

祖父が六十九歳で亡くなりました。犬と共に野山へ猟に出た際に、脳内出血で亡くなりました。私の自慢の祖父がチビを追うように天国に逝きました。しかし、不思議と泣けませんでした。チビとの別れほど、寂しくなかったのです。晩年こそ優しくなってきましたが、私は物心ついた頃から祖父が何をしたら喜ぶかを知って行動していました。畑仕事や牛の世話、犬の食事の魚のあら抜き、犬小屋の掃除も僕の仕事でした。

私が夜店で買って大きくなったニワトリの世話もしていましたが、学校から帰ってくるとニワトリは祖父にバラバラにされ、冷蔵庫にいました。

その日の晩、私は何でもない素振りでニワトリを食べました。祖父が全てで、正しい家でした。私はこの家に預けられ、育ててもらっているのです。祖父は、今の世の中のおじいちゃんほど、優しくできない人物のようでした。

買ってくれた物はなぜか毎回帽子でした。毎年帽子だけは祖父が買ってくれました。お菓子やおもちゃなど何一つ買ってくれませんでした。

祖母はかんしゃく持ちで、よく両手や両足をバタバタさせ、

「死ぬ！死んだる！」

と言いながら、よく暴れる人でした。子供ながら怖い姿を見た私は、祖母にも大変気を遣いました。

昼寝の最中、私が足をドンドンさせたとわめき散らし、暴れた時、祖父は私を山へよく散歩に連れて行きました。

祖母はたまに三十円くれましたが、祖父母はあまりお金がないような気がしたので、三十円でさえも貰いにくかったのを覚えています。祖母は九十七歳まで生き、最後まで暴れていました。同居していた叔父や叔母は、

「高雄！勉強しや！かしこなりや！」

そう言って出て行きました。

私は、中学三年生の高校受験の半年前まで予習・復習という勉強の仕方を知りませんでした。私など大家族に預けられた半端者です。さすがに犬も予習・復習など教えてくれません。

私は小学一年生の四月に右目を大怪我して、一年間学校に行けませんでした。一年の遅れが、中学三年生まで響きました。とにかく私の十歳の時は、みんなとの別れが多く、チビとの別れ以外は涙の出ない別れでした。

私は一人で過ごす毎日が続きましたが、祖父の死をきっかけに街に出ていた母が、たまに帰って来るようになりました。私には実の母がいたのです。すっかり忘れていました。

度々、車の助手席で待たされ、

「おばちゃんがお金をくれた。」

と祖父母が言っていました。

「お金だけをくれる、親切なおばちゃんがおるなあ。」

そう思った事が子供心に記憶があります。今思えば母も訳があり、私に逢えなかったのだと、母の事を可哀想に思います。

その母がこの頃、月に一、二度帰ってくるようになり、ある日一匹の真っ白の子犬をアイロン箱に入れて帰ってきました。それがフクです。幸福の『福』です。私は真っ白な子犬にフクと名付けましたのです。

私が初めて子犬を育てるのです。フクは可愛い子犬でしたが、気が強かったので後に大変な目によく遭いました。

でもフクは、山で山犬の子犬ジゾウを連れて帰ってくるのです。ジゾウは雌犬で、山犬の群れからはぐれ、一匹で山に住んでいたのも、人間にはなつきませんでした。唯一、フクにだけ心を許す子犬でした。後に私の人生を変える、美人で優しい我慢強い犬でした。

今思えばジゾウは、恋人で彼女のような犬でした。私がフクにしてもらった最高のプレゼントです。ここからが、人生の不思議の始まりです。私の転機です。

昭和三十五年、当時私の田舎では、犬の放し飼いが当たり前でした。繁殖期ともなれば、雌犬に二十キロ四方から雄犬が集り、十頭くらいで喧嘩が始まります。『一番強い犬が雌犬を守る』という儀式が、春と秋には当たり前のようにありました。

我が家のシロも参戦し戦っていました。でもシロは獵犬なので、鎖に繋がれている事が多く、他のライバルのように毎日参戦していませんでした。私はシロの強さを見たくて、よく鎖を放し

てやりました。

犬達の中に飛び込んだシロは、多くの犬を蹴散らし、いつも一番になっていました。その中に最大のライバルであり、近所でも有名な大型犬マルがあり、数多くの死闘をシロとマルは繰り広げていました。マルの顔には、シロに噛まれた傷があり、シロの鼻にはマルにやられた傷が残っていました。当時、村にはシロとマルの子がたくさん産まれました。

一番の勝負は、シロがマルを追いかけて池を泳いで渡る光景です。その様子は未だに映画の様に覚えています。両者一步も引かず、約半日も噛み合いが続きました。

そんなマルも年には勝てず、晩年は足を引きずり寝てばかりの生活でした。また、シロも猟師に盗まれ、行方不明になりました。

シロ・マルの一時代も終わった頃、我が家には二番手のチビが控えており、シロ・マルのなき後はチビの時代が訪れました。

年をとっていたチビですが猟犬。一般の犬には負けません。しばらくはチビの子供が多く生まれましたが、チャウチャウというライバルが二・三キロ先からやってきては、チビとの死闘を繰り広げたのです。チャウチャウには手下がおり、チビに集中攻撃をする先方に出るようになり、チビも劣勢になってきました。私はチビに加勢するようになり、私とチビ対チャウチャウ集団の戦いが始まりました。私は何度も危ない目に遭い、さすがに顔を覚えられ、追い回されるようになり、三才年上のマコちゃんに助っ人を頼みました。

マコちゃんは、三才上の人達とはあまりうまくいってない子供だったので、私とよく遊んでくれました。私は親が離婚しているので、マコちゃんの親には、一緒に遊ぶのを良く思われていなかったのか、よく居留守をつかわれました。その家には私の祖母のお姉さんがおり、私をよくかわいがってくれていたので、マコちゃんを呼ぶときはそのおばさんに言って遊んでいました。

マコちゃんは男ばかり五人兄弟の末っ子でした。上にはテルとヒトシがいて、私の事を「タカタカ」と呼び、可愛がってくれたものです。マコちゃんを呼びに行き、その二人に捕まると、マコちゃんとは遊ばず、ヒトシの子分のような扱いをされる事がたびたびありました。私は最年少の子分で、村祭りや花火に連れて行ってくれました。

ヒトシはバスに花火をぶっかけたり、中学でタバコを吸ったり、よく喧嘩したり、ダンジリの屋根に登ったりと村では鼻つまみ者でした。

テルには、スクーターの後ろにロープで襦を結んでもらい、よく雪の上を引っ張ってもらいました。体の小さい私は、全身泥だらけになりながら楽しんでいました。

絵の上手いブーちゃん。メンコが上手いブーちゃんの兄アキヒコ。私をよくいじめたタカシにユタカにカーキー。そしてその最上のリーダーがヒトシでした。ヒトシは中学卒業と同時に暴力団に入ったので、次のリーダーがアキヒコでした。ですが、アキヒコはヒトシほど頭が良くなかったので、私はブーちゃんやマコちゃんと遊んでいました。後にアキヒコは病気で早死にし、ユタカも病気で早死にしてしまいました。子供の頃、私をよくいじめた人達は早死にしました。

田んぼを耕す時、私はいつもカゴの中に入れてされていました。そのカゴのはるか上空には、鷹

が飛び回っていたのを覚えています。

チビは上空に向かって鳴き、いつも私のそばを離れませんでした。以前、猿に山へ連れ去られた人もいるくらいの山奥で、他にはマムシや山犬もたくさんいました。チビは何度か、マムシに足を噛まれていました。夕方に家に帰るのですが、私はいつも黒牛の背中に乗せられ、チビはいつも遠回りして帰る。ほとんどこのような毎日でした。

祖父母は七人の我が子を育てていたのですから、孫にかまう暇などなく、ほったらかしでした。この当時、田舎には色々な人々が暮らしていました。

コミッタンは六十代のショートカットのおばあさんで、僕の家から五十メートルくらいのところに猫と住んでいました。いつももんぺを穿いており、顔はいつも真っ黒でした。好物はお好み焼きでしたが、村に唯一あったお好み焼き屋で半生のお好み焼きを食べさせられ、よくお腹を壊していました。祖母によく、

「コミッタン見てきたり。」

と言われ、生きているか家に確認しに行ったりもしました。そして私が小学校低学年になった頃、コミッタンは体を壊して入院し、そのまま帰って来ませんでした。

ハウキ屋のバアサンは私のひいおばあさんで、百八歳で亡くなるまで一人暮らしをしていました。家から一キロくらいの所に住んでおり、私はお遣いでよくバアサンの家に行かされました。一人で行くのは嫌でしたが、百円くれるので嫌々ながらも行っていました。チビもついて来てくれましたが、その道のりは、五歳の私には遠く感じました。

ハウキ屋のバアサンはよく、自分の家の庭でおしっこをしていたので、庭はいつも臭く青カビが生えていました。また、歯が一本もなかったので、物を噛む時は顎が大きく動いていました。夜になると真っ暗で、怖い思いを何度もしました。ある帰り道では、人魂を見ました。今でも鮮明に覚えています。一番近くで見た人魂は、ハウキ屋のバアサンの家からの帰り道でした。

マサアキは向かいの家の長男で、自分の家から五百メートルほど離れた小屋に一人で住んでいました。よく家に酒を飲みに来ていましたが、酒癖が悪く、いつも長々と説教をしていました。今思うと、私の家には叔母さんが二人嫁にいてなかったのが、よく来ていたのだと思います。マサアキは喘息持ちで、夕方になるとよく発作が出て苦しそうにしていました。

また、秋田犬とシェパードのミックス犬タローを飼っていましたが、フクはよくタローにやられていました。散歩に行くと、放し飼いにされたタローが喧嘩をしにやって来てやられたものですが、タローは後に家出をし、マサアキも喘息の発作が出て風呂場で死んでしまいました。犬が可哀想な最期でした。

マモッチャンは近くの車屋の次男で、どもりでした。村の秋祭りではダンジリを引いていて、私が幼稚園の頃よくダンジリに乗せてくれました。数年後マモッチャンは結婚し、新婚旅行先でおねしょをしてすぐ離婚されたと人の噂で聞きました。その後、車修理の仕事を辞めて姿を消し、行方不明になり村からいなくなりました。

ヒトシは村一番の悪ガキでした。私より六～八歳年上で、私が気づいたときには既に中学生で、村では相当喧嘩をしていました。ヒトシはマコッチャンの兄で、家に行くと、「タカ！クワガタ持っておいで！」

「ケンカさせよか！」

と言われました。家からミヤマクワガタを持って行くと、ヒトシはオオクワガタを持っていて、ことごとくやられました。また村祭りに子分をたくさん連れて行っては喧嘩をしていましたが、当時どこの奴よりも強く、私もついて行っていました。バスに花火をぶっかけたり、タバコを吸ったりしていましたが、私には優しくしてくれました。

大人になり暴力団に入ったらしく、親分の女と逃げたり、車の当て逃げをしたりして、ヒトシの家にはよく暴力団や警察が来ていました。何年振りかに会った時、ヒトシは全身刺青だらけになっており、

「タカ元気か？」

「大きくなったな。かしこうしとるか？」

と声をかけてくれました。それから数年後、夏の海で溺れた子供を助けたヒトシは死んでしまったそうです。

オオム口君は二、三歳年上で、私の家の近くにお婆さんと二人暮らしをしていました。私のように、親に捨てられたのだと皆が言っていました。私は子供ながら、自分より可哀想な気がしていました。よく私を家に連れて行ってくれましたが、家の中はいつも真っ暗で、唯一テレビの光がある家でした。私は家ではテレビを見せてもらえなかったのも、いつもオオム口君の家で見せてもらっていました。唯一のテレビだったのですが、そのテレビもオオム口君の引っ越しと同時になくなってしまいました。

ブーチャンは私の絵の先生で、絵を描いては私に見せてくれました。当時の鉄人28号やエイトマンなんかは本当に上手く、その影響を受けた私の絵を見た幼稚園の先生はよく驚き、絵を描いた紙を持って走っていたのを覚えています。小学校でも毎年表彰してもらい、一年生の時に展覧会で特賞をもらった事もありました。すべてブーチャンのおかげです。

ブーチャンは村では優しく、私はお兄ちゃんのように慕っていましたが、ブーチャンは末っ子だったので、私を弟のように可愛がってくれました。私が高校生の頃ブーチャンは結婚したと人の噂で聞きましたが、後に離婚したらしくそれ以来、村には帰ってきませんでした。また、ブーチャンはよくプールに連れて行ってくれ、カナヅチの僕を泳げるようにしてくれました。

オリバーさんとの出会い

家から小学校までは、片道三キロくらいあり、子供の往復六キロは大変なしんどさでした。

私が小学四年生になった頃、通学路の中間辺りの古家にイギリス人のオリバーさんが引っ越してきました。オリバーさんは馬二頭と大型犬一匹、猫三匹を連れて私の町にやってきました。当時、オリバーさんは大学の先生をしており、日本の事をイギリスにレポートする仕事をしていました。外国人を見たのは大阪万博以来でした。オリバーさんは白人で綺麗でした。

朝会うと「ハロー」、帰りは「グッバイ」。毎日会うので家に遊びに行くようになり、お遣いをする、馬の背に乗せてくれました。初めて馬に乗った時の感動は、今でも忘れられません。その体験が後に、私の人生を大きく変える事になるとは、人との出会いとは不思議なものです。

私は馬に乗りたいたので、毎日遊びに行きました。乳牛の牧場に牛乳を取りに行ったり、馬に餌をやったり、大型犬の散歩に行ったり。馬に乗せてもらう為に色々な事をしました。

小学五年生になった頃、オリバーさんの紹介で亀岡にある乗馬場の跡へ、片道十五キロの距離を自転車で尋ねて行きました。場所も適当でしたが、偶然その人に会えたのです。消防署に勤めた三十代の男の人で、とても優しくな人でした。遠くから訪ねてきた私に、オリバーさんの紹介という事もあり、馬というものを教えてくれました。乗馬場はとても広い所でした。

当時、この乗馬場には二頭の馬がおり、一頭は栗毛の片目が潰れた馬でした。もう一頭は、競馬場から引き上げてきた馬で、太っていましたがよく走る馬でした。競馬上がりの馬は僕を乗せて、乗馬場の柵の中を暴れるように走り回り、気が狂ったように私を振り落とした事もありました。きっかけは近くにいた人がドアを閉めた際の音が気に食わなかったみたいでした。私は初めて腰を抜かし、四つん這いで逃げました。しばらく馬に乗る気がしなかったのですが、この人が乗れと言うので怖がりながら乗っていました。馬の怖さが身にしみました。片目の潰れた馬は大人しく、品がありとても綺麗な馬でした。

私が行くと、決まって競馬上がりの馬でしたが、思う存分乗っとけと言わんばかりに馬に乗せてくれました。尻や足の皮が剥け、帰りの自転車を漕ぐのも辛い日もありましたが、中学生になるまで通いました。その男の人はまだ結婚しておらず、親と同居していました。この人が留守の時は、その人のお母さんが苺をくれたりしました。

消防士で忙しかったのに、この男の人はよく付き合ってくれたなと思います。また、もっと馬がいる所を紹介してもらいました。そこは、京都の撮影所に使う馬や、祭りに使う馬を飼っている所で、松本さんという一家でした。私は高校生になり十六歳でバイクの免許を取ったので、それからはバイクで通いました。

ジゾウは三度の出産を経験し、五歳になっていました。食欲もない割にお腹が大きくなり、次第に元気がなくなり、お腹以外は痩せてガリガリになり家からいなくなりました。

ある日、学校から帰りジゾウを探しに山や田んぼを探しました。するとジゾウは夕方の藪の中でじっと死を迎えようとしていました。

私はジゾウを抱っこして家へと帰り、獣医の戸田先生に電話をしました。七時頃でしたが、先

生は外出中らしく、九時頃にやっと電話がありました。今から家に来てくれるとの連絡をもらい、先生の到着を待っていました。

先生がジゾウのお腹を診て『子宮脳腫』という病気だと判明し、今から手術しないと助からないので、私と先生とジゾウで先生の病院へと向かいました。十一時頃、病院に着き、さっそく手術が始まりました。私は助手をする事になり、毛を剃ったり足を持ったり消毒をしたり、助けたい一心で冷静に助手をこなしました。膿の溜まった子宮を二本取り出すのにも成功しました。

先生は私に悪い場所や、内臓の場所を教えてくださいました。ビール瓶二本ぐらいに大きく腫れ上がった子宮を、そっとお腹の中から取り出し、お腹を縫い塞いだのは深夜一時頃でした。

「よく手伝ってくれたな！」

「気分悪がらず、最後まで手伝ってくれて感心した。」

と言ってくれたので、涙がこぼれそうになりました。我に返り、ジゾウの事が愛おしくて可愛くて、もっと大事にしてやろうと思いました。先生に入院させてくださいと言うと先生は、

「飼い主の傍におる方が安心するから、家に連れて帰ったり！」

と言いました。先生は深夜に私とジゾウを家まで車で送ってくれました。手術代は分割で良いかと聞くと、

「お金は君が大人になってからでいい。」

と言ってくれたので、私は助かりました。

先生とは大人になった今でも会うようにしていて、現在飼っている犬も遠くの病院へ連れて行きます。遠く離れた今、たくさんの動物病院へ行きましたが、戸田先生のように犬に多く触ることのできる先生はいません。

元気になったジゾウは半年家出をし、行方不明になりました。

あきらめかけた時、五キロほど離れた他の犬達と暮らしていると噂で聞き、僕はバイクで探しに行くことにしました。噂通り、数頭の犬達と群れを作りジゾウは野山を走り回っていました。遠くから見ていた私は、ジゾウが一瞬幸せそうに見えたので、しばらく見つめてました。本当はジゾウは山犬で、山で多くの犬達を群れを組んで走り回り、このように日々を過ごしていた犬で、私と山で出会い、ついて帰ってこなければこのように走り回っていたのかと思い、声を掛けられませんでした。

ジゾウが私を見つけ、立ち止まってこちらを見ているのが分かった瞬間、

「ジゾウ！」

そう叫んでいました。

一目散にジゾウが駆け寄って来ました。他の犬達もこちらへ来ましたが、ジゾウ以外は近寄ってきません。

「ジゾウ元気そうやな。」

「楽しいんか？」

「何で帰ってこんかったんや？」

と言っていると、帰ると言っているような気がしたので、連れて帰る事にしました。ジゾウはバ

イクにぶつかるようについて来ましたが、その後に数匹の犬もついて来ていました。私が怒るとみんな悲しそうな顔をし、ついて来るのをあきらめていました。可哀想でしたがジゾウだけを連れて帰りました。当時、フクもいましたので、これ以上犬の数を増やす訳にもいきませんでした。今でも残りの犬の悲しげな顔が目には浮かびます。

ジゾウは三回出産し、病気で死んだ子犬以外は全部飼い主を探して貰って頂いたのですが、最後の一匹だけなかなか飼い主が見つからず苦労しました。

私は高校三年生になっていましたので、車の免許を早くに取り、その頃は車で子犬の飼い主を探して回る事ができました。ずいぶん探し回りました。その中で亀岡のある山寺で、最後の子犬をもらって頂く事になりました。

そこの奥様が、私の子犬の飼い主探しの苦労話を聞いて下さり、

「大変でしたね！」

「私のお寺で飼わせてもらうわ。」

と言って下さり、やっと子犬の貰い手が見つかったので安心し、帰り道は涙が大量に溢れてきました。こんな涙は久しぶりで、帰りの車の運転もできないくらい涙が出ました。

三回の出産で十八匹、六匹の子犬は産まれてすぐに死にましたが、十二匹は飼い主を見つける事ができ、貰い主を探せたのは私の誇りです。私は、子犬みんなが可愛がってもらえれば何よりですが、心配で見に行く事ができませんでした。

数ヶ月後、最後の飼い主のお寺から手紙が届きました。

『犬の名前をチョコと名付けました。あなたと出会った日が二月十四日のバレンタインデーでした。チョコはお寺に来るお客様の靴を噛んで隠したり、いたずらばかりしてやんちゃですが、皆に可愛がられています。どうか安心して下さい。』

本当に良い人に貰って頂いたと安心し、すぐに返事を書きました。人の心が伝わった瞬間でした。

そんな頃、家ではフクが亡くなりました。

フクは、私が中学一年生の時、母親が仕事場の近所で子犬もらってきました。フクはたったの五歳で早死にしました。原因は私です。私が悪いのです。

当時、田舎で『フィラリア』という犬に蚊が媒介する伝染病が流行っていました。フクは夜になると咳をして苦しがっていましたが、戸田先生に診てもらうと肺や心臓の中にそうめん状の虫がいて、犬の内臓を住み家にして増えていく病気で、予防しないと感染し、やがて死ぬ病気で、当時の予防法は四月から十二月の蚊のいる季節に毎日、薬を飲ませないとだめで、お金も手間もかかる、犬にとっては大変な病気にかかってしまいました。弱っていくフクの姿を見るのも忍びがたい毎日でした。

散歩に行ってもすぐ倒れ、歩きたがらず、咳も一晩中していました。ただただ可哀想で、この病気にかかると死ぬのを待つしかない、癌のような病気なのです。

フクはスピッツの血が入っていた為、少し気が強く、人を見ると追いかけて行く犬でした。そのせいか犬小屋にいる事が多くなり、蚊に刺されるのが多くなったのが悪かったのです。

この頃、私も学校から帰ると毎日散歩に行けていました。近所の人達が、
「タカチャンは本当に犬が好きな子供や。」

そう皆が言っていたぐらい、雨の日でも毎日散歩に行きました。

幸福からとった名前のフク。フクが家に来た時期は、私にとって良い時期ではありませんでした。当時私は中学生で、勉強の仕方も知らず、毎日学校に残されていました。クラブ活動にも行けないくらい、担任の目の敵にされ、いつもクラスの悪役でした。

「谷口君がいじめました。さぼりました。嫌な事を言いました。」

私を悪役にする事により、クラスはまとまっていたましたが、私も負けてはいません。一对三十で喧嘩をしたり、学校では嫌な毎日でしたが、家に帰るとフクとジゾウの二匹の犬に癒されていました。山へ行ったり遠くへ行ったり、山犬達と喧嘩したりと、学校から帰ると二匹の犬と毎日山を走り回っていました。家に帰っても犬しかいません。

勉強をしろとか、何かしろと言う人がもう家にも近所に誰もいません。自由です。叔父、叔母も出て行き、気を遣わなくていいのです。

祖父が亡くなり、祖父の長男のギャンブルの借金で田んぼや畑が持ていかれたので、仕事がなく、祖母も当時、墓の掃除の仕事に行っていました。小学校高学年ぐらいからは毎日、一人で二匹の犬と遊ぶ毎日でした。

高校受験の際、行く所がないと言われ、また運悪く、担任が私だけ三年間一緒という最悪の学生時代でした。でも、出稼ぎで家を出て、月に一度しか帰って来ない母には心配を掛けたくなかったもので、何事もなかったように一言も言いませんでした。

隣の町の小学校の体育館の屋根が抜け落ちるという事件がありました。その小学校の近くに友人が住んでいたという理由で私の仕業にされ、全員の前で私を犯人扱いした先生達がありました。悔しくて眠れなかったものです。

帰って来た母が、

「どないしたんや？」

と聞いてきたので、初めて打ち明けました。

母は、近所の村の役をしていたおじさんにその話をし、そのおじさんが学校に話をつけに行ってくれ、何人かの先生は春に学校からいなくなりました。心がスーっとしたのを覚えています。

その時、即座に私を犯人だと言ったのはブッチャーでした。ブッチャーは教頭になっていて、私が過去にこめかみに銀玉鉄砲を当てたのを覚えていて仕返ししたのでした。

「クソ！」

「父親のいない僕をバカにしゃがって。」

担任も一切私をかばってくれなかったもので、今でも学校の先生は大嫌いです。

私がしていない事も、悪役の私の仕業にされたそんな三年間でしたが、近所の京都大学を出た一家に私の勉強を頼みに母が行き、中学三年生の夏から教えてもらいに行くことになりました。初めて勉強の仕方や点数の取り方を知り、何とか高校受験に間に合い、高校へ行ける事になりました。その教えてくれた人が、

「こんな賢い子に、どんな教え方しとったんや。」

と中学に怒鳴り込んでくれた事を後で知り、私の人生はこの頃から徐々に良い方向に向かいます。

生まれてから決して恵まれた人生ではなかったように思います。しかし、徐々に良い人生が始まる予感がしました。

一番辛かった時を共に生きたフクが死んだのです。私の怠慢で早死にさせてしまい本当に申し訳ないと思い、今でも後悔しています。フィラリア。憎いフィラリア。私は、虫は殺しませんが、蚊だけは皆殺しです。

私の目覚めはチビの鳴き声によって起こされ、竹のカゴの目からはカラスの大群が空を回っているのが見えます。おそらくチビは私をカラスから守ってくれていたのでしょう。

顔を起こすと、遠くに黒い大きな物が田んぼの中を祖父と、のしのしと歩いています。祖母は、田んぼの畦道に小豆を植えています。私は二、三歳頃からこの風景に慣らされて、これが私の誕生の瞬間でした。

当時、私の村の山々には山犬の群れが住んでいました。村にやってきてはニワトリや生ゴミを漁っていました。村の犬達とよく喧嘩していましたが、大体十頭ぐらいの群れなので、村の犬と喧嘩になれば敵いません。最初、ボス犬が喧嘩になれば一頭出てくるのですが、喧嘩が始まると二頭、三頭と加勢しにくるので、村の犬は一頭でいる事が大半ですので、逃げてしまいます。何頭かの犬は、山犬軍団に殺されてしまいました。

そんな中、私はチビ、朝吉の二頭を連れて軍団と度々戦いを繰り広げていました。軍団のボスは、白色の大きな雑種。まずそいつが出てきます。続いて茶色の犬が必ず出てきます。山犬のボスと最初に戦うのは決まってチビです。チビは相当年をとっていましたが、猟犬です。チビと山犬は、血みどろの戦いをしていました。

次に、茶色の犬と戦うのが朝吉です。朝吉は私が近所で生まれた、誰の子か分からない六匹の子犬の中から、一番大きくて強そうな子犬を育てた頭の弱い、大変大きな犬です。元気で鎖を解くと、どこへ行くか分からないバカな犬です。

まだ子犬の頃に、尻尾を掴んで逆さに持っても鳴き声も出さず、猟犬にするにはもっとも良い素質でしたがバカ犬で、祖母からは、「かなんわ。捨ててこい。」

とよく言われました。村でも手を焼いていて、どこの犬にでも喧嘩を仕掛け、怪我をさせるやっかいな犬でしたが、喧嘩だけは強い犬でした。

山犬の茶色と朝吉は戦いますが、朝吉は強いので他の犬達が加勢に来ます。二頭、三頭と来ると誰が誰だか分かりません。大騒ぎです。中には、私を噛みにくる犬もいて、私は棒切れで追います。石も投げます。しかし恐いです。何回か噛まれそうになり、作戦を変えないと仕舞いには私も殺されます。

何回かそんな戦いをし、山犬達は私やチビから逃げるのですが、勝負はついていません。山犬達は私達の顔や臭いを覚えていて、遠ざける日もあり、次第に戦う場を失い、平和な日々が増え、私は退屈になってきました。

そんな時、朝吉が突然死にました。私が鎖を放すと道路に走り出て車に当たり、頭を強く打ち即死でした。前方に赤い車が停まり私達を見ていましたが逃げました。この男の顔はしっかり覚えていてます。

後に私の中学の先生になりましたが、私は当時まだ小学三年生だったので、この仇を討つことができませんでした。朝吉とはわずか一年の付き合いでしたが、頭の弱い朝吉らしい死に方でした。

車に轢かれた朝吉と私を見ていた近所のお寺の坊主が朝吉を運んでくれました。悔しくて、あの男の顔は一生忘れません。後に名前は福岡といい、社会の先生でした。私の担任には一度もなりませんでしたが、皆には言いふらしてやりました。

朝吉を失った私は、チビと二人になり山犬軍団との戦いは出来なくなり、散歩に行くのも気掛かりでした。時には、山犬軍団を見ると、逃げる日々が続き、近所のマコちゃんに相談し、マコちゃんが私の話に共感し、私とチビに加勢してくれる事になり、大変心強く思いました。

マコちゃんは私より三歳上でヒトシ、キョツグ、ティバーの弟で、私の遊び仲間です。顔はゴリラに似ていて、メガネを掛けていました。

マコちゃんも朝吉ほどではないけれど、ちょっと頭が弱かったように思います。それからの日々、マコちゃんとチビと私は山犬の姿を見ると追いかけるようになり、マコちゃんは飛び道具のパチンコを持ち、私にも持つように言い、私達はパチンコを使うようになりました。立場が逆転し私達の姿を見ると逃げるようになり、マコちゃんの顔がゴリラに似ていたからか、村には来なくなりました。

その後私達は、パチンコで、村の中に身を潜め、走る車をめがけて撃っていました。悪い事ですが、車が停まるのでおもしろかったです。朝吉の仇打ちのつもりでした。

銀玉鉄砲で、運転している人めがけ撃ちまくり、たまたま中学校の教頭のコメカミに命中し車から降りて来ました。顔は黒く太っている人で、私はブッチャーと名前を付けました。

中学生になったマコちゃんは、ブッチャーに朝礼の時、全生徒の前で小学生と銀玉鉄砲で遊んでいる奴がおると言われ、赤っ恥をかかされたらしいです。おそらく、この辺りでマコちゃんが住んでいるのを知っていたのでしょう。

また三年後、私が中学生になった時、私に罪をかぶせてきたのもブッチャーでした。ブッチャーはよほどコメカミに撃たれたのが、腹が立ったのでしょう。三年経っても、仕返ししてきたのですが、無実の罪に陥れられ、中学時代は大変な日々でした。それにしても、ブッチャーが顔を真っ赤にして車から降りてきた姿は、面白かったです。

朝吉を轢いた福岡にも、私でない罪をきせられ、この二人にはやられました。今思うと私も相当悪い子供でした。野放し状態の子供でした。

朝吉ゴメン。仇打ちも出来ないまま本当にゴメン。もっと長くいたかったけど、私が鎖を放してしまったばかり、車にはねられて。天国では、賢い犬になっといてな！

私は六年生になると、過激さが遊びに反映し、テレビの世界と現実の世界が区別できなくなり、度重なる大騒ぎを起こすようになりました。この日もこんな事になるとは思いもよりませんでした。

マコちゃんやブーちゃん達と戦争ごっこをやり、白坂峠で谷の左右に別れて爆竹を木の枝にくくり投げ合い、ロケット花火を竹の束に挿し、数千発の撃ち合いをしました。

総勢二十名程で、中には父親の空気銃を持ち出す者、弓矢、鉄兜、本当の死人が出て不思議ではない戦いをしており、この頃テレビで赤軍派の事件がよくニュースでやっていました。

土曜日の午後、いつものように戦争ごっこをしていたら、パトカーのサイレンが鳴りジープやらバスやら四、五台の警察車両が峠まで来ました。

私達は山へ逃げました。マイクで、「出てきなさい。君らは包囲されている」と言っていました。

私達は残りの爆竹やロケット花火を警察車両に撃ちまくりました。私達の停めてある自転車を見て、名前を読み上げていき、私の名前もマイクで言いました。村の人達は山で銃の撃ち合いをしていると警察に電話したらしく、大勢の村人達も見に来ていました。山に登って来る人もあり、私達は山を下り散々怒られました。私より年上のマコちゃんやブーちゃんは中学生なので警察の車に乗せられ、連れて行かれました。

峠で花火が鳴ると山にこだまして、遠くで聞くと本物の銃声に聞こえるそうです。つついやり過ぎたので、ブーちゃんやマコちゃんの親からは、私と遊んではいけないと言われました。

小学六年生の夏、私は家を出ました。祖母と餅をつく、つかないとの事で家を出ました。祖父が小四で亡くなり、この時期から餅つきは私の仕事です。でもこの時は、遊びに行く約束を友達としていたので、家を出ました。

私は生まれてから、小学校六年生のこの一年だけ家に犬がいませんでした。チビもメリーもシロも朝吉もチーコもみんな天国に逝き、私は一人でした。

私は勉強もせず、毎日ブーちゃんやマコちゃんやと遊んでいました。また小学校の遠い村の友達も出来て、自転車でも遠くまで行くようになり、遊ぶ相手も増えて、毎日楽しんでいました。でも、男手が私しかいないので、餅つきは私の仕事です。もめた私は、夏休みというのもあって家出をします。

以前、チビ達と行った山の奥の方へ入って行き、行った事のない山へと登って行きました。道も分からず、登ります。ただただ一人で、犬達がいた時は、怖くありませんでしたが、暗い山は苦手です。

そんな夕方、山の中で灯りが見えてきて、山小屋のような建物を見つけました。山小屋の周りをぐるぐる回り様子を見ていましたが、勇気を出して中に入りました。

中には、男の人と女の人が一人、猫が五、六匹いました。私は、家出の事で涙が出て、お腹

が減ってとにかく話をしました。女の方は小屋の奥に姿を隠しました。猫と男の人だけが私の話を聞いてくれ、

「君がここに来る事は、分かっていました。以前、君がこの辺まで犬と来ていたのも知っています。これは偶然でなく、必然です。私がこの世に生まれ、君がこの世に生まれた事が、会う必然の始まりだから、君が来るのを知っていました。君は小さい時から苦労したんだね。」

まるで神様に言われているような嬉しさが込み上げてきました。

私は、猫を飼った事がないのですが、この猫達は、私の膝に乗ってなついてきました。小屋の中には、ローソクが一本あり、その人はローソクの灯りを消して私にこう言ったのです。

「ローソクを消すと真っ暗だが、火をつけると小屋全体が眩しいぐらい明るい。家にいると電気を付けて明るくなるのが当たり前。でもここでは、ローソクでも明るい。ありがたさが分かる。不足不満が多いのは、自分を厳しい世界に身を置かないと分からない。僕は山の中で修行をしています。君もローソクの灯りがこんなに明るいのを今、気づいたでしょう？夜空がこんなに綺麗なのも、明るい所では分かりません。君はここに来た事で、ありがたさや祖母の事を思えるでしょう。今夜は泊まってもいいし、村まで送ってあげてもいい。」

と言われ、私は祖母が心配していると思い帰ることにしました。また明日、来てもいいかと尋ねると、その男の方は神様のような顔で

「いつでも来ていいよ。当分この山小屋にいるから。」

と言ってくれ、私はその夜は一人で帰る事にしました。

夜道も暗い山も、この日から全然怖くなくなり、無事に村まで帰れました。次の日もその山小屋に行きました。男の方は、

「君の為なら、いつでも力になってやる。君が本当に困った時、助けてあげる。」

と言ってくれました。

生まれてから私には、犬以外一人も味方がいませんでした。こんな山小屋で、初めて理解してくれる人に出会い、安心しました。

奥に隠れるようにいた女の方は、一言も話しませんでした。夏休み中、毎日行く事にしましたが、一回も話しませんでした。男の方は、頭が少し足りない人なので面倒をみていると言っていました。

この男の方と話していると、私自身が今まで何て幸福だったのか、自分が不幸だと思っていた事が、実は幸福な家に生まれ、犬や近所の人たちに恵まれ、自由であったか。また、遠くには母親もいる。そのように安心し、自分が本当は良い人生だと思えるようになりました。

ある日、土産に花を持って行くと、猫が花を食べ出し、男の方は、見て笑っているだけでした。私は猫が花を食べるのを初めて見ました。男の方は、

「ありがとう。猫が喜んでる。」

と言っていました。

小屋の二人は、顔は黒く汚れているようでした。風呂はどうしているのか.....服もいつも一緒でしたが、不幸そうには見えません。それどころか、話している顔は幸せそうでした。いつかこ

んな事も聞かせてくれました。

いくつかの企業の相談役として、相談に大企業の人達が来ると。私は子供なので、その時は何の話かわからず、大人になってからこの企業の名前を知りました。

また、僕に会いたい時は心の中から僕に会うように願ってくれ、そうしたら必ず会える。とも言ってくれました。

私は子供ながら、いつでも会える事を実感していました。これ以来、私の想像する神様の顔は、必ずここで会った男の人の顔で、何とも言えない『安心の顔』。この男の人のような顔の人とは、大人になってもう一人出会うのです。

夏休みも終わりに近づくと、男の人がまた修行に出ると言っていました。近々みんなの集まりがあるので、ここを出なければいけないと。私は、実感の湧かぬまま、その日を迎えました。

九月一日、学校から帰るとまた山小屋に行きました。いません。分かっているもいなかったのです。猫も、女の人も、みんないなくなりました。二、三枚の名刺が置いてあり、初めて男の人の名前を知りました。

『○○企業相談役 ○○ ○○』

三枚とも企業名は有名な会社でした。

山小屋では、畑を手伝い、野草採りや水汲み、楽しかった仕事中は祖父の手伝いを思い出していました。一ヶ月あまりの出会いでしたが、私にとって人に話のできる思い出でした。

祭りの夜

私の村には、豊作の年にお祭りがあり、各村にダンジリが引き回しをします。

約三日間村々を引き回し、昼と夜に六ヶ所のダンジリを一ヶ所に集め舞台を組み、その上で演劇をしたり漫才師が来たりで、三日間村中の人々が舞台を観に来ます。

ダンジリには男の子しか乗れません。あと、お囃子の人達と屋根の上に二、三人乗ります。ほとんどの人は父親がダンジリを引っ張るので、その子供がダンジリに乗せてもらっています。

私はダンジリが自分の家の前に来た時、近所のマモチャンがダンジリを引く時は大体おりますので、マモチャンが、

「この子はワシの村の子や。一番前や。」

と言って、ダンジリの前に座らせてくれます。

また私の村のダンジリには、屋根にヒトシが乗っていて、他の村の人達とケンカをします。

祭りには大抵『ワル』が屋根に乗ります。

特にヒトシは『ワル中のワル』、一番『ワル』です。ヒトシも私を見つけては、

「タカ乗っとけよ！」

と声を掛けてくれ、昔から知っている村の若者達ばかりで、私は何年も一番前に乗り、朝から晩までダンジリに乗っていました。

途中休憩の時に下に降り、トイレに行ったりお菓子を貰い食べ、また上にマモチャンに乗せてもらいます。たまに他のお父さんに、

「この子、前に乗せたって。」

と言われ席を譲ると、マモチャンが

「この子、うちの村の子やから前や！」

と言って私を前に乗せてくれます。

マモチャンもヒトシと変わらず、喧嘩っ早い人で、どもりで、お人好しで、森の石松のような人でした。

私はヒトシとマモチャンがいるので、祭りの日が来るのを楽しみにしていました。朝から乗り、夜十一時ぐらいに終わりますが、その頃には乗っている子供が親と帰っていきます。一人、二人と減り、いつも最後が私で、家から遠い場所でおまけに暗い夜で、祭りは秋にあるので、夜は寒いし心細い思いでいっぱいです。ヒトシとマモチャンは酒を飲んでベロンベロンで、私の事などお構いなしです。心の中では泣きたいぐらいで、最後は寂しい思いでとても不安でした。ダンジリの中で泊まり、朝までいたい思いで、そんな時、決まってチビの鈴の音がします。

チビの首輪には、猟犬用の大きな鈴が付いていて、山でイノシシを追い出す時などに祖父に聞こえるために付けている鈴です。チビが夜中じゅう、鈴を鳴らして村々を走り回すので、村の人からは、

「昨夜、チビ来とったわ。」

「またチビ夜中歩いとったわ。」

とよく言われました。チビの鈴の音は、みんな知っていました。鈴の音が遠くから聞こえて、私は安心するのです。

夜も十二時前、祖父母は私を迎えに来ず、チビに迎えに来させているのです。チビの姿を見つけると、私はダンジリから降りるのです。体は寒いけど心は暖かい気持ちで、チビと家まで歩くのです。

チビは四年生まで迎えに来てくれました。今思うと、ダンジリの後をついて来ていたのかもしれない。

黒牛のハナちゃんの脱走

ハナちゃんは私の家の黒牛です。

春は田んぼを耕し、牛乳も犬達のエサになり年に一頭、子供も産み、働き者です。時には荷物も引っ張り、背中には私が物心付いた時には乗せて歩いてくれた牛です。

ハナちゃんが寝ている場所は、馬小屋の後ろです。あまり広い所ではなかったのに、出産したての子牛を自分で踏んで死なせた事もあります。私は、生まれて喜んでいましたがショックです。

私と祖父で子牛を三輪車に乗せ、山へ埋めに行きました。子牛でも私の家のシロぐらいあり、五十キ口はありました。私は牛の世話もしていたので、可哀想でなりません。祖父は私を働き手として見てくれていたので、何かと私を頼りにしてくれますが、こんな時は見たくないものです。穴を掘り埋めるのですが、大きいので大変でした。

当時、私の住む村では人間も土に埋めていたので、人魂はしょっちゅう見ました。牛や犬も埋めていたので、人魂は五、六回見ました。

私と祖父が山から帰ると、ハナちゃんは元気にエサを食べています。

牛は犬よりも情の薄い動物で、少し頭は良くないように思います。私は犬が一番、馬が二番、牛は三番、ニワトリは四番ぐらいに思います。

ハナちゃんをよく脱走します。祖父に鼻輪を引っ張られているのに逃げ出し、祖父は手にロープで摩擦し大怪我です。村の人は、ハナが走り回って暴れとると言いに来るのですが、祖父は私に、

「チビに連れて来い言え。」

とよく言っていました。私はチビに、

「連れておいで。」

と言うと、決まってチビは、ハナちゃんの鼻輪に付いているロープを引っ張って帰ってくるのです。

ハナちゃんもチビの事は怖がっていたので帰ってくるのです。ハナちゃんは度々脱走をするのですが、決まってチビが連れて帰ってきます。

ハナちゃんは私が生まれる前からいた牛です。散歩に行ったり、私を乗せてくれたり、私もエサをあげたりしましたが、私が小学校へ上がる前、牛飼いのおっさんにトラックで連れて行かれました。私は泣きましたが、ハナちゃんも泣いていました。連れていったおっさんはその後、牛の針で歯を掃除していて歯茎に刺さり、急死してしまいました。また、そのおっさんの息子も牛飼いでしたが、猟銃で撃たれ死んだそうです。

ハナちゃんは自分の子供が死んだ時は泣かなかったのに、連れていかれる時には目に涙を溜めて泣いていました。これも今になれば分かるような気がします。

猟をしに山へ

私は遊んでいても、祖父が山へ猟に行くと言えはついて行く子供でした。チビ、シロ、朝吉などの犬も一緒だから桃太郎のような気持ちになるので、山へ犬と行くのは大好きでした。

田舎の山々はほとんど行きました。一番注意する事は、祖父の前に出ない事。キジ・山鳥などを撃つ時、私が前にいるとすぐに撃てないからです。一度キジが山から飛び立った時、私が前にいたので撃ち損ねてから、私は犬を放してから祖父の後ろにいました。

当時の猟犬達は、みんな山から鳥やイノシシをうまく追うように仕込まれていました。特にチビは、イノシシでも鳥でも最高の働きをします。山に放すと尾を振り、臭いを嗅ぎ分けて走り出し、獲物を見つけると鳴いて知らせる頭の良い猟犬でした。

シロは主にイノシシやシカ狩りに連れて行くリーダー犬で、大きな犬でした。毛色が白いので、山では良く目立ちますが、チビや朝吉は毛色が茶色なので山に入ると見えなくなり、どこにいるか分かりません。また、途中ウサギやタヌキの穴を見つけると、見分けるのが難しいので、注意しないと犬を撃つ恐れがあるので、茶色の犬は首輪に鈴を付けて音で知らせます。

ソフト山へ行く時、二頭連れて行く事が多く、チビと朝吉、チビロ、メリーという組み合わせが多く、リーダー犬はチビなので上手くいきますが、シロとチビでは二頭ともバラバラに行くので、あまり良くないみたいでした。また、山では祖父の猟仲間と出会う事もあり、いろんな人達と会いました。子供は私ぐらいで、みんなに紹介してくれました。なかには私が高校生になった時に、担任になってくれた野田先生に紹介してくれました。

祖父は先生に私の事を頼んでくれたらしく、高校の三年間は野田先生のクラスで大変臍戻してもらいました。

「お前の祖父は、猟の腕が良い有名な人や。おじいさんがお前の事頼むと言ってはった。」
とも言っておりました。そのお陰で、色々お世話して下さい有難かったのです。

秋から冬にかけての山でした。

山々が茶色の時、キジや山鳥の雄の羽根の色が綺麗で、大猟の時には私と祖父のナップサックに鳥の羽根が花の様に咲いてはみ出している帰り道、子供達が鳥の羽根を欲しがったものです。

キジや山鳥の尾の方の羽根は、一メートルぐらいあり、投げると良く飛ぶのをみんな知っていたので、猟の帰り道は大変な人気で、みんなが羽根を欲しがり、

「タカすごいな！」

と言われるのが私の自慢でした。

家に帰ると鳥の羽根を毫り、鍋のお湯に浸けます。それで細い体毛を毫り、ツルツルの鳥にします。ナイフで腹を裂き、内臓を綺麗に取り分けます。祖父は手際よく作業していき、その夜は大抵『すきやき』です。近所にお裾分けを持って行きます。ホク屋のばあさんやマコちゃん、ブーちゃんの家にも分けて持って行きます。

イノシシの猟の時は五、六人の大人のグループで行くので、私はイノシシが獲れた時に行き、犬を連れて帰りますが、大人達はイノシシを肉屋に売るために集まって話をしていました。私の

シロは優秀なリーダー犬なので、イノシシの肉を多く持って帰る事がよくありました。

イノシシの肉は、豚と牛の中間のようでおいしく食べましたが、鹿の肉は臭いがきつく、私はあまり好きではありませんでした。

私は猟に行く祖父が自慢で、高倉健とだぶり、映画の高倉健が大好きでした。もしこの話が映画になれば、祖父の役は高倉健さんでお願いしたいものです。

村の犬達は夜、集会があり、沢山の犬が集まります。中には、十キロも離れた犬も集会に参加するのです。春と秋に集まるサカリの時とは違い、みんな大変穏やかに集まり、臭いを嗅いだりジャレ合ったり、雄、雌入り混じって話し合いをしています。

その中に首輪のない犬も混じっており、たぶん山犬の仲間からはぐれた犬か、野良犬かも知れませんが、当時村の山には山犬軍団が十頭ぐらいの群れでいました。仲間割れした犬もおりましたので、私は餌をやり、首輪のない犬を慣れさせておりました。毛色の白い尻尾のない犬が特に私になつき、半年程家の近くで生活するようになり、私にも心を許したのか近くに寄って来るのです。顔には喧嘩で出来た傷があり、雄の犬でした。私は名前をシッポナと付けました。

シッポナは最初あまり寄って来なかったのですが、私が餌をあげたので家から離れなくなりました。私を見つけると走って来るようになり、何か話したい事がありそうで、シッポナが怪我もしているのかと体を見てやりましたが、異常はありません。歯は綺麗なもので、まだ二歳ぐらいだと思います。犬種は日本犬の雑種だと思います。色々調べて行くと、シッポナは獵犬だったのだと思います。山で迷子になり私の村へ来たみたいですね。犬達の集会では、このような旅の途中の犬も沢山いて、相談していたのでしょう。私にしか近寄って来ないので、家の者は知りません。飼い主とはぐれた犬は悲しい目をしています。捨てられた犬も一緒です。私を見ているようで、そんな旅の途中の犬には、面倒を見たくありませんが、私の家には二頭の犬がいて、これ以上飼うと祖父から叱られるので飼う事も出来ず、隠れて餌をやるのが精一杯です。シッポナが良い犬で獵犬のような仕草が見られるので、私は思い切って祖父に相談する事にしました。

話を聞いてくれた祖父は、獵師仲間に聞いてみてやると言ってくれ、後日シッポナの家が見つかったのです。シッポナはやっぱり私が見た通りの賢い獵犬で、箕面の獵師の犬でした。品格もあり誰にでもなつかず顔にも傷があったので、獵犬でも主にイノシシ狩りの犬でした。

飼い主の獵師は、イノシシに突き飛ばされ山で死んだらしいのでした。シッポナはこの山での事故以来、イノシシを追って山で逸れたのです。人間の世界同様、犬の世界でも集会で飼い主の話をしていたのでしょう。シッポナは、箕面の獵師仲間の元で飼ってもらった事になり、私との短い生活が終わりました。本当は飼ってやりたかったけど、これで良かったと思っています。

一ヶ月して、箕面からシッポナが帰って来ました。箕面の新しい飼い主の家は三日程でいなくなったらしく、私の村まで二十キロ程の山々を自分で山道でも通り、一ヶ月ぶりに帰って来ておりました。私はソーセージを食べさせてやりました。だいぶ痩せて帰って来ました。山々を元の主人の臭いを辿り探していたのかも知れませんが、元気も少ないように思います。しばらく私の家で元気になってもらえば良いと、前のように集会で夜な夜な集まり、昼は私の家で寝るのですぐ元気になると私は軽く思っていたのですが、次の朝、シッポナはいなくなっておりました。二、三日で帰って来るのではないか様子を見ておりましたが、二度と帰る事はなかったのです。

箕面の新しい飼い主にも電話をしておきましたがそちらにも帰る事もなく、元の飼い主を思い、山へ死に行ったのかもしれない。獵犬にはそういう事がよくある話です。

アキチャンの続き

私にメンコを売ってくれたブーチャンの兄、アキヒコが結婚する事になり、村を出て行くのが決まりました。アキチャンは私より十歳ぐらい上でしたが、二十そこそこで早い結婚でしたが、どうやら養子に行ったみたいでした。アキチャンの家は貧乏の子沢山の典型的な家で、男ばかり四人もいて、アキチャンは二番目ですが、アキチャンの兄弟は四人中三人までが『どもり』で、「タタターカー、かしこなれよ。」

と最後に言ってくれ、結婚した先は農家で、朝夕働き過ぎで苦勞していると祖母達が話をしていました。二、三年後に身体を壊して、アキチャンが家に帰って来ておりました。

アキチャンは痩せ細り、前の面影はありません。養子先で馬車馬の様に働かされたのでしょうか、嫁ぎ先ですぐ死にました。アキチャンなんか可哀相やけど、笑顔だけが私の胸に思い出としていつまでも残っております。

ハットリのデブ

私とよく遊んでいたマコちゃんやブーちゃんが中学生になり、私は秋の運動会を中学校に見に行きました。村の二、三歳上の人達が中学には沢山いて、私をいじめる人や女の人もいて、近所で引っ越しで二人姉妹のハットリという家族が住むようになり、そこのオッサンは植木屋をしていて、人相の悪いオッサンで、私は怖がっていました。またそこの親の嫁の方はオナオさんの店に入り浸りで、私が三十円のチョコレートを買いに行くと毎日おり、私に怖い顔して話しかけてきます。「この子か。親のおらん子は。」

とオナオさんに言って、オナオさんは気まずそうな顔をしていたのを思い出します。その姉妹の姉の方はとても可愛く、私より二歳上のカーキーに色心を抱いていましたが高嶺の花で、全く相手にされていません。その姉はどうやらブーちゃんに気があったらしく、高校生の時にブーちゃんと付き合ったという噂があり、私はお似合いと思っておりました。中学生になったブーちゃんは、とても背が高くなり、顔は可愛らしいのでよくもてていたようですが、中学生になっても私とよく遊んでくれていたので、私は運動会でブーちゃんが走る姿を見て応援していました。

マコちゃんも背が高くなりましたが、なんせ顔が本当にゴリラに似ていて、おまけに頭が悪く、全く女の子にもてず相変わらず私と遊んでいましたが、走っても遅く、ヒトシの弟とは思えないぐらい同級生にいじめられ、少し私は惨めな気持ちで見っていました。そこへハットリの妹の方が走る番になり、私はマコちゃんやブーちゃんのノリでこの妹を応援したつもりでしたが、つい口から出たのが「このブタ！ちゃんと走らんかい！」

と大きな声が出ていたのです。この妹は中学生で約百キロはあり、イノシシクラスのブタで、顔も姉と全く違いブサイクで、オカンに似ていて性格も悪く、村のいじめの対象的な存在でした。

「こらブタ！走れ走れ！」

私は調子に乗って言っていました。それをここのオカンが聞いていたらしく、次の日オナオさんの店にチョコレートを買いに行ったのです。私は昨日の事など忘れ、このハットリのオカンにこっぴどく叱られました。

「アンタ、人の子にブタブタ言って。親のない子はかなんわ！」

と言われました。この後、この妹は減量して見違える程変わりましたが、顔だけはブタでバランスが悪い女の子になりました。この頃から私は悪ガキの要素も備えており、近所の人から叱られる事が多々ありました。

私には天敵が沢山いて、ほとんどが私より年上の人達でした。ユタカ、上中のタカシ、ハットリのブタ、タバタ、ハットリのオカン、ヨシジ、この者達は私を目の敵にし、私を見つけてははじめました。私は年下ですが、いろいろと仕返しをやりました。犬のシロをタカシやユタカが怖がっておりましたので、祖父が、

「シロは放したらアカン。」

と言っておりましたが、タカシとユタカを見つけてはシロを鎖から放してやりました。こいつらがシロを見つけて逃げ回る姿が面白くて、度々放してやりました。当時の犬は皆放し飼いでしたが、シロだけは危険なので、祖父が鎖で繋いでいたのを私が放します。シロは村で一番大きく猟犬の中でも大きな犬で、一匹でイノシシを持ち帰ったほどの犬で、人など簡単に死なす程の力を持って、走ると地響きするぐらいバタバタと足音がします。村の犬も尾を巻いて逃げ、シロを放すと大騒ぎになります。

私はヒヒヒ...と笑い、

「カマシタロカ。」

と言うらしく、村の人が、

「タカがシロを放し、人を噛ます。」

と祖父に告げ口する人もいましたが、私はこの行為をいっばいしました。またタカシの帰る道に糸を張り、村のあちこちに糸をタカシの顔の高さに合わせてやったら、タカシはもちろんブーチャンやマコチャンも目を赤くして私の家に来ました。なぜか私だと分かってしまうのですが、

「そんな事するん、お前だけや。」

と言っていました。タカシは短足で、ブーチャンより一つ上で、姉や妹や兄もいたように思いますが、タカシの兄にいじめられた時は、母の弟の順ちゃんに言い付けて怒られました。

タカシには目の敵にされていました。この人の家とは私の家も合っていないと思いますが、祖父が死んでからは特にいじめられておりました。またユタカも私を目の敵にしておりましたが、こいつはよく殴りやがったのを覚えています。人に殴られて痛いと思った事はないように思いますので、今思えばきつくなかったのか、弱いパンチだったのか、加減していたのか、村の年上の人に殴られて痛い思いは一回もなかったと思います。

またユタカにはジュンコちゃんという姉がいて、二人兄弟でした。そのジュンコちゃんは私をととても可愛がってくれ、よく蝉とりに行きました。私は姉もいなく、ジュンコちゃんのような姉が欲しかったのですが、私が中学の時、山道をダイエットで走っているジュンコちゃんの姿を見ると、山に隠れるジュンコちゃんになっていました。私はげんなりしました。

ユタカは中学校を出て家業の電気屋を継ぐために電気専門の学校に行きましたが、すぐ辞め、ヤクザのようになりました。子供の時から病気で腎臓が悪かったので、結婚してすぐに死にました。

私の村にアパートがあり、タバタ兄弟が小学校五年生の時、引っ越して来ました。タバタの兄は私より二歳上で、みんなにいじめられてよく泣いていました。特にカーキが近所で、カーキは

よく泣かしていました。私は年下ですがそんなタバタをいじり、両手に今も残る程の掻き傷を付けられました。タバタは私には向かってきて、掻き毟る攻撃に出て、私はやられました。当時掻き毟る攻撃をする者などおらず、私はびっくりして手に出来た傷を見るのですが、次の日もからかう日々でした。

タバタにはアッチャンという私より二、三歳下の弟がいたのですが、病気がちでとてもひ弱い子供で、みんなはいじりも相手もしませんでした。タバタ兄は、私にはこの弟をいじめられないように必死に注意していて、「タカ、イジメたらあかん。」

とよく言っていました。タバタ一家も植木屋で、ハットリのおやじの仕事をしておりました。タバタは都会っ子らしく、山などで育った事もなく、夕方山へ連れて行き、かくれんぼをして、タバタを鬼にしてみんなで逃げると、タバタが山から泣いて下りて来ます。この鳴き声が山に響き、祖母達が、

「なんや今の。山で誰か泣いとるやん。」

と、先に家に帰って私によく言っていました。私達が泣かしているのは誰も知りません。タバタもついて来なかったいいのに、遊んで欲しいので、また山に来ては逃げられて、一番小さい私を追いかけてワーワーと走って来たものです。タバタは中学生になると、親の仕事で引っ越しして行きましたが、本当は仲良くできたのではないか？私ぐらいが遊んでやればよかったと今では思います。

松本のおじい

高校生の私は、担任に祖父と借山で出会った野田先生に三年間お世話になり、大変良くしてもらい楽しい三年間でした。中学三年の春、近所のサク先生に受験勉強のため特訓され、勉強のコツが解り、高校の三年間はクラスで十番以内でした。テストの前には予習をする事を覚え、一日前でもテストは良い成績を修めるようになり、高校ではテストに出る所を全部教えてくれる学校でしたので、大変助かりました。その当時私には動物が好き以外、特別好きな事もなく、この三年間の春、夏休みはほとんど馬のアルバイトに行っていました。アルバイト先は中学生の時、お世話になった乗馬先の男の人の紹介で、亀岡にある牧場に行く事になりました。その牧場で北海道の野生の馬をトラックで買ってきて、人が乗れるようにする仕事で、私にとっては大好きな夢のような仕事でした。

初めてこの牧場を訪ねたのは高校一年生の春でした。私はバイクの免許を持っていたので、中学の時と違い家から三十分ぐらいで行く事ができる。こんな近くに馬がいるのが夢のようでした。バイクがあると世界が広がり、人の出会いも広がっていったのでした。最初、この牧場には八十歳のおじいがあり、私を快く迎えてくれ、会ったその日に

「お前馬乗れるんか？運動してきて。」

と、いきなり馬小屋の馬を連れて、夢のような事を言ってくれました。オリバーさんや乗馬場での馬に乗った事はあっても、町中、つまり普通の道を馬で歩いたり走ったりできるなんて夢のような話です。

「はい。はよ行って来て。」

このおじいは私と会って三十分で自分の馬に乗って散歩して来いと言ってくれる人。私も、はいと言って馬で行く人。この関係がかみ合い、高校の三年間はこの仕事をするのです。この日乗った馬は、この間まで北海道の草原を自由に走り回っていた馬で、人など一回も乗せた事のない馬でした。ここへ来てからは馬小屋には入りっ放しでストレスも溜まり大変な目に遭っていましたが、そんな事は後で知り、乗るまで私は何も知りませんでした。

おじいが口輪を持ち、私が馬に乗ると、この馬は走り出し、どこへ行くやら知る事もなくどんどん勝手に走り、車の走る道路を横切り山の方へ走り、ゴルフ場の中に入って行ったのです。私はこの馬から落ちる事のないように必死にたてがみを掴み、死ぬ思いでした。幸いゴルフ場の中は広く、馬の運動には良い場所で、ゴルフ場の人達も騒ぐ事なく私と馬の姿を無視しています。私は暴れる馬を何とか止め、馬から降りて馬をなだめる事ができましたが、二度とこの馬に乗るのは嫌です。

馬場ゴルフ場を走り回り、プレーをしている客もあっけにとられ、周りは映画のワンシーンでも見ているように思ったかもしれません。コース内を暴れ回る馬から必死に落とされないように走る姿を客は皆見ており、後で聞いた話では、牧場に来た馬達は最初このゴルフ場で走らせ、疲れさせて大人しくさせる訓練をしていたそうです。馬も臭いを嗅いでここまで来たのでしょうか。またゴルフ場の人達もこのような姿は慣れていて、客以外はびっくりせず冷静でした。私はこのおじいにその後も何度も殺されかける思いをさせられました。

この馬はゴルフ場内の池に落ち、ようやく止まりました。

こんな事もありました。前日、競馬場で走っていた馬を引き取り、おじいは人を乗せる訓練をしたかったらしく、たまたま私がバイクで来たもので私に、

「また散歩行っというて！」

と言いました。私は前日も酷い目に遭っていたので気は引けましたが、この競馬馬はとてもカッコ良く、私の一番好きな青毛の馬で一目惚れしましたので、乗せてもらう事にしました。いつものように庭から一般の道に出ますが、さすがに人を乗せていた馬なので最初は言う事を聞いて素直に歩いてくれたのですが、なんせ競走馬。何かの音でスイッチが入り農道を走り出したのです。そのスピードたるや、中学の時に乗馬場で乗った馬とは違い、この間まで現役で走っていた馬だけありました。それは見事な走りっぷりで私も気持ちよく走っていましたが、川の中まで入り走りだして、橋で首が飛ぶぐらい近くまで行き、もう少しでこの橋に頭ごとぶつかる寸前で止まってくれました。

川から上がり農道を歩いていたら、近くの乗馬場の人がこの辺りの道をあまり知らない人で、私の馬の後ろをついて行っても良いかと聞くので、先を歩いていたのですが、私の馬は雌馬で、後ろからついて来る馬が雄で、私の馬のお尻の馬に頭を乗せてきたもので、私の馬はまた走り出しました。道はアスファルトで、馬の蹄鉄は鉄なので、走るととても大きな音がします。近くの中学校の生徒が窓から見ていて大騒ぎしたもので、馬も気合が入り、後ろの馬の事など知らない心死の暴走となり、川に落ちるわ、走り回すわで本当に怖い思いをしました。そんな思いでおじいの元に帰ると、

「そうか。」

ぐらいでいつも事が済んでしまい、心の大きさかボケとるのか、最後まで分からずじまいの毎日でした。

そんなある日、おじいの息子が奈良から一時、嫁と帰って来ました。当時息子は五十代ぐらいで、娘一人と息子一人の二人の子供がいて、北海道や奈良に行っている時は、おじいとおばあが面倒を看ていたのです。おじいは私を息子に紹介し、

「この子、馬乗れるから奈良連れて行け！」と勝手に私を奈良に住み込みで行かす事を決めていました。息子も、

「明日支度して持ってきて。」

と言いました。私も調子良く返事し、次の日からは奈良で馬の世話をしに行く事になりました。奈良での仕事は千頭の馬の世話とドリームランドでの一般の人を馬に乗せて歩く仕事でした。私は京都の亀岡からトレーラーで奈良まで乗せてもらい、これから大変になる事も知らず、初めて家を出て仕事をする事になるのですが、家には当時フクとジゾウの二頭の犬がいたのですが、この二頭とは一ヶ月ぐらいお別れです。犬の事など忘れ、馬の仕事に没頭して行くのでした。

京都と奈良は意外に近く、一時間ぐらいの道のりでしたが、この息子と色々話をして、一時間の中で私を大変気に入ってくれた事を覚えています。奈良に着いて、私の部屋を作ってくれるこ

とになりました。私の部屋は、馬車馬の隣の元馬小屋で、この馬車馬は一トンぐらいある馬で、ドリームランド内の馬車を引く為に特別大きな馬でした。夜になると寝返りしては壁を蹴るので、夜中何回もびっくりさせられるのです。また私の前には口バの小屋もあり、五十頭ぐらい飼われていて、朝四時に一斉に鳴くのです。口バの鳴き声とは、今までに聞いた事ない声で、オットセイの鳴き声に似ているので、五十頭も鳴くと誰でも早起きになるのです。

私は大体五時に起き、朝、馬の寝糞を掃除し、餌を作り四頭にやるのですが、餌の入れ物はドラム缶を半分に切って作ってあり相当大きく、四頭もの餌やりは大変です。おまけに水も一斗缶に二杯は飲みます。餌を食べている時に、糞を小屋から出し干します。これだけで一時間かかり、それから馬を一頭ずつ洗い馬の身体も干すのですが、四頭も洗うのは時間のかかるもので、やはり好きでなければ出来ません。また馬の中には私を噛む馬もいて、こいつには何回も噛まれ、正面に見ている時は噛まないのですが後ろを向いていると背中を噛みます。

私は今までいろんな動物に噛まれてきましたが、犬、猫、猿、牛、山羊、オオクワガタ、蜂。その中で馬に噛まれるとどうなるかと言うと、バットで殴られたような重い痛みが背中に走ります。また、足を噛む馬、壁に私を押し付けてくる馬、可愛い馬は顔を寄せ付け甘えてくるのです。宝塚歌劇の舞台に出ていた『松竹梅』という名の馬は特に甘えたで、私の顔をペロペロ舐め、身体を押し付けて、広い場所で放していても名前を呼ぶと近づいてくる人懐っこい馬もいて、人間のように性格も色々で、馬の頭の良い事を知らせて勉強になりました。

一度こんな事もありました。馬小屋の中で馬の足が痺れたのです。寝返りしてそのまま足に体重がかかり過ぎると馬の細い足が痺れ、立ち上がれなくなってしまったのです。このまま立ち上がれないと、馬は死ぬのでジャッキの力で馬を持ち上げようと、馬の胴体に巻いた鎖を引っ張っていき、馬の身体が浮かんでその馬を竹のほうきで叩き歩かすのですが、一度痺れるとなかなか歩けないので、親さんが竹ほうきが粉々になるまで馬を叩きました。私は今まで、ただ馬が好きだというだけで馬を飼ってみたいと思っていましたが、馬を飼うという事は、犬を飼うのとはちょっと違うように思いました。また馬も最後の方になると、私の足音を聞いて鳴いてくれるようになり、一ヶ月もいると私はすっかりこの奈良に慣れていきました。私は高校の三年間、春休みや夏休みはこの牧場で働き、夏の祭りや馬を出す仕事、つまり時代祭りや祇園祭りなど京都の町を馬で人を乗せて歩くアルバイトもして、祭りに参加もさせてもらい良い体験ができました。

祇園祭りは、夏の七月の暑い時期にあるので、仕事終わりに親方が全員の飲み物を私に買って来る様に言ったのもで、当時出初めのジントニックをジュースと勘違いして買い、初めて飲みました。喉が渴いていたので、一気に飲み干しました。私は酒など飲んだ事がなく、酒だと知らず初めてジントニックを飲みましたが、身体全体が蕁麻疹で真っ赤になり、夏の京都で死にかけました。高校生の私は夜、他の馬の仕事の人達と一緒に食事をするのですが、全員大人なので、夜はビールを飲みます。当然私にも勧めるので、少しずつ酒にも慣れアレルギーも出ず、毎日ビールの味も知り、大人達の中で馬の世話と人付き合いにも慣れていくのでした。この時に子供の頃、気を遣いながら生きてきた事が大変役に立ち、大人から可愛がられるようになり、人の気持ち

も動物の気持ちも、先に何がして欲しいか？という事が分かる人間になりつつありました。子供の時の、親もなく、祖父母に預けられて育てられ、叔父や叔母達に気を遣い、近所の年上の人達にもまれた事が大変役立ちました。他人の飯を食うという事で、家のありがたみが分かり、田舎の祖母の事も優しく見るようになりました。

私は今でも乗り物の中で一番馬が恐ろしく、また楽しい乗り物だと思っています。またロバは馬より身体が小さいので、飼い易いと思っていましたが、ロバも気性が結構荒く、ロバ同士の喧嘩がすごくて、傷が身体中あるロバが多いようです。ロバの爪は、馬のように鉄を打ち付けてないので、二ヶ月に一度爪を切るのです。親さんが私に、

「ロバの爪切りをするから放したらアカン。怪我するからな。」

と私に言い、私はロバが怪我したらだめだと勝手に思い込み、最後まで一度もロバから手を放しませんでした。体は小さくても、力強いロバは暴れます。噛んできます。蹴ってもきます。私は振り回されても噛まれても、決して放さず、全身泥だらけでした。最後に親さんが、

「今までロバの爪切りで放さんかったん、お前だけや。」

と目を潤ませて私に言い、何で感動しとるんや？と私は思いました。親方は、自分の身が毎回怪我するのを気にして言ったらしく、私は勘違いをし、ロバが怪我すると思い込んでいたのです。それから親方の態度が一変しました。私をここの後継にすると言い出し、私の母親に話をすると毎回言うので、私は困りましたが、親切さが増し、私は特別扱いになり大変良くしてもらいました。

当時で日給は一万円もくれ、私は家に帰る時、三十万円近いお金を受け取るのですが、高校生の私にはいらぬ金で、全部祖母にあげたのを覚えています。

馬のお尻に止まり、刺すアブがいて、馬や牛しか刺さないアブがいて、休みが終わる頃、そのアブが私を刺すようになれば一人前だと言われ、私はアブが追いかけてきた時、嬉しく思いました。アブは馬の尻尾や口が届かない所を刺すのですが、馬も痛いらしく飛び跳ねて痛がります。人を乗せている時などは、注意しないと馬が暴れます。アブには大変気を遣いました。私は馬の背に立ったまま走らせたり、馬だけ走らせ、私は木に掴まり馬を私の下に来させ、飛び乗る事も出来るようになっていました。馬も名前を呼ぶと私の元に来るようになっていました。小学校の時、オリバーさんに馬に乗せてもらってから、七、八年で馬の気持ちがすっかり分かる人間に成長させてもらいました。春休みも終わり、私は奈良から京都のおじいの元に一旦帰り、挨拶して帰ろうと思っておじいの元に行くと、私におじいが、

「よ一頑張ってくれたの一。」

と言ってくれ、私の張り詰めた気持ちが一挙に途切れ、一ヶ月の終わりの淋しさと自分の家に帰れる喜びとで涙が溢れ出しました。親さんやおかみさんにも挨拶して、ジゾウやフクの待つ自分の家に向かい、また夏休みも来る事を約束して帰るのです。

私が馬に夢中になっていた頃、家ではフクがフィラリアという病気に徐々に侵されていました。フクは夕方になると咳をします。昼は普通ですが、夕方から夜に咳をして日々に苦しそうです。

。川西の獣医『戸田先生』に診てもらうのですが、フィラリアとは蚊から犬へと伝染する病気で、当時私は初めてその病気の事を知りました。幼い時から犬がいましたが、私の田舎ではフィラリアで死ぬ犬など珍しい病気で、私は無知でした。フクの体にはフィラリアの成虫が繁殖し、肺や心臓に溜まり、夜になると咳をする病気らしく、伝染すると治らないらしいです。この病気は犬から蚊へ、そして犬へと広がるらしく、もう一頭のジゾウにもすでに伝染しており、ジゾウの方はフクのような症状は出ていませんが、これから春夏秋まで毎日薬を飲ませなければなりません。今では月に一回飲めばいい薬になりましたが、当時は毎日一回飲ませなければ予防になりませんでした。

私は春休み中、フクとジゾウをほったらかしてアルバイトに出ておりましたので、馬も犬も人も気かけなければ何か心配事を起こすと思います。私はフクに出来る限りの看病をしました。昼は散歩にも普通に行けるのですが、夜が苦しそうな咳をしていたフクも、冬になると症状が治まります。また春になると、咳で苦しい夜になります。そんなフクも、二年間の闘病生活にも終わりがきました。昼間の散歩中に倒れる日々が続き、貧血になって体も弱り、五歳でこの世から旅立ちました。中学一年生で私の元にアイロンの箱に入って、電車やバスに乗って来た。手のひらに乗るぐらい小さな、真っ白な子犬がわずか五年でこの世から旅立たせてしまい、私は心から悔やみ自分を責める日々が続きました。無知からフクを早死にさせ、私は動物の病気に興味を持ち勉強しました。残ったジゾウに症状が出ない事を祈る思いで、ジゾウに予防の薬を飲ませる事にしました。

思えば、山で逸れフクについて来た犬で、当時フクにしか心を開かず、フクを親のように思い育った山犬です。二歳の頃は家を出て、半年ぐらい野犬になった事や子宮濃縮の手術をしたり、子供を三回も出産してくれたり、思い出の多い犬です。フクとジゾウは毎日野山を私と歩き池や川で泳ぎ、私の一番きつい時を共に過ごした犬達です。私の気持ちがだんだん外に向き、馬の世界やバイクで遠出する事が増え、犬達との距離が開くとともに病気に付け込まれ、可哀相でした。フクが死んで五年後にジゾウも遠い世界に行ってしまいました。

人生最大の出会い

私は二十歳になっていました。ジゾウも徐々にフィラリアの症状が現れ最後まで頑張りましたが、当時私は美容師の勉強をしに美容学校に通い、大阪まで行っており、早朝に給食センターでお弁当を作り、夜はオートテニスのクラブでアルバイトをしており、犬達と過ごす時間も益々少なくなっていました。ジゾウの治療だけは欠かさず戸田先生の元に指導してもらいに行っていました。

なぜ私が美容師を志したかという、本当は子供の頃から動物が大好きで、高校では三年間馬の世話をアルバイトでし、もう少し早く勉強のコツを知っておれば、戸田先生のような獣医さんになっていたかも知れません。進路相談で担任の野田先生に、

「犬や馬が好きなら、ワシの友人がお前みたいなやつ探しとるから紹介したる。」
と言って下さり、その地は遥かブラジルとの事。私の頭の中にブラジルなど想像の出来ないぐらいの話で、私は動物の医者は無理でも動物の美容を仕事に考えていますと話すと、祖父の友人の野田先生は、

「動物するんやったら、人間も一緒や。」
とおっしゃり、私も人間でも良いかと帰りに近くの美容室で美容師になる為にはどうしたらなるのかと聞き、その人の卒業した学校を教えてくださいと電話をしました。その流れで美容学校に入学する事になりました。

私は美容学校で犬や馬以外の人生最大の味方を天から授かりました。私が出会ったどんな暴れ馬より、ジャジャ馬の人間の彼女が出来たのです。この動物は人間のメスで、人間では女性と呼びます。ジゾウが山で子犬の時、フクの後ろをついて来て、私には最初なつかず、縁の下で、
「う～う～」

とうなり声をあげて、人間になつかなかった山犬の子供、ジゾウにそっくりで、出会いこそ気持ちが通じなかったのですが、次第に親しくなり、私の人生最大の理解者となった手間のかかる女性です。

二十歳の私はこの彼女と度々、戸田先生のを訪ねたり、田舎の山々をジゾウと共に走る日が続き、動物が少し苦手な彼女も、ジゾウだけには心を開き、ジゾウの話が分かるまでになり、ジゾウも心から彼女を迎えるのでした。

ジゾウはその後、フィラリアが進み、七才でこの世を旅立つのですが、私の事を彼女に託すように優しい目でバトンタッチして逝ってしまいました。ここで私の犬達との長い長い生活が人間との生活に変わり、人生も良い方向に進みすばらしい人達に出会いました。子供の頃に出会った人達や犬達との生活で自然に身についた愛が情を生み、育ててくれた昔の愛に感謝します。